

南山大学の博物館実習

－取り組みとその考え方－

黒澤 浩

南山大学の博物館実習

—— 取り組みとその考え方 ——

黒澤 浩*

はじめに

博物館実習は言うまでもなく、博物館法施行規則第一条・第二条に基づき、大学において学芸員資格を取得するために「修得すべき博物館に関する科目の一つ」（文部科学省2009）とされているものである。また、そうした法的根拠を前提としながら、博物館実習は学芸員養成において座学で学ぶ他の必修諸科目（博物館概論等）で得た知識を、博物館活動という実践につなげるという意味で、学芸員養成の仕上げとしても位置付けられる。

こうした博物館実習は、各大学で、様々な物理的・人的制約を伴いながら、それぞれが工夫を凝らして指導に当たられていることは、全国大学博物館学協議会（以下、全博協）が実施しているアンケートでもうかがい知ることができる。

しかし、2020年の初めより広まった新型コロナウイルス感染症の影響は、そうしたこれまでの積み重ねを打ち砕くに十分なものであった。なぜならば、実習は本来的に人と接することを基盤としているにもかかわらず、感染防止のために人と距離を置くように求めることは、実習そのものを困難なものにすることは誰の目にも明らかだったからである（註1）。

特に、新型コロナウイルスが蔓延し始めた2020年にはほとんどの大学で実習がオンラインとなったり、館務実習や見学実習ができなくなったりし、ただでさえ綱渡りの状況の中で日々の授業を行っている担当教員にさらなる負担がかかったことは、全博協が2020年度に実施したアンケートの結果から読み取ることができる。

こうした状況は、まだ2、3年続くものと覚悟しておくべきだろう。だが、そうだとしたら、この状況の中で、博物館実習、あるいは学芸員養成について考える機会とすることは決して無意味なことではないように思える。例えば、コロナ禍を通じて、従来のやり方を改めたり、新たな方法を開拓したりすることも考えられるはずだし、実際にそうした対応をしてきたはずである。

本稿は、筆者の勤務する南山大学での博物館実習について、その取り組みと考え方を紹介しようというものである。その意図するところは、もちろん南山での実習に対して様々なご意見をいただきたいということもあるが、上述したように一実習担当者としての、筆者自身の自省という意味合いも強い。

* 南山大学 教授

1. 南山大学での博物館学芸員養成課程の概要

(1) 沿革

愛知県名古屋市に所在する南山大学は、1949（昭和24）年に創立した戦後の新制大学であり、カトリック教会の一会派である神言修道会を運営母体とするミッション系の大学である。

南山大学で博物館学芸員養成課程がいつ、どのように始まったのかは、今回記録を調べることができなかった。博物館法施行規則が1952（昭和27）年に文部省令として定められているから、当然その後だろうし、南山大学の大学博物館である人類学博物館が博物館相当施設として登録されたのが、1967（昭和42）年なので、それと相前後して始まったものと推測される。

筆者は2004年に南山大学に赴任し、当初から博物館実習を担当していた。筆者が赴任する前の学芸員養成課程は、講義科目として「博物館学1」「博物館学2」「博物館学3」と「生涯学習論」、そして「博物館実習」が設定されていた。このうち、「博物館実習3」のみ非常勤講師に委嘱していた。

2012年のカリキュラム改正で、学芸員養成課程の必修科目が9科目19単位となったため、それまでの「博物館学1・2・3」を博物館法施行規則で定められた科目に合わせて細分したが、科目名称は施行規則にある科目名称ではなく、南山独自のものとして「博物館概論」「博物館学A（博物館教育論）」「博物館学B（資料保存論）」「博物館学C（博物館資料論）」「博物館学D（博物館展示論）」「博物館学E（博物館経営論）」とし、これに「生涯学習論」「視聴覚メディア論」、そして「博物館実習」とした。また、それに伴い、博物館概論と博物館実習以外の必修科目については、学外の専門家に非常勤講師を委嘱している。

なお、これら必修科目のうち、博物館概論・視聴覚メディア論・生涯学習論の3科目は、人文学部共通科目として登録することができ、そうすれば卒業単位として認められることになる。そのために他の必修科目に比べ、受講者数が多いという傾向がある。

(2) 学芸員養成課程を履修する学生

では、南山大学において学芸員資格を取得しようとする学生にはどのような傾向があるだろうか？まず、所属学部から見ると、学生の大半は人文学部の学生である（註2）。

次いで外国語学部、総合政策学部の学生がおり、法学部・経済学部・経営学部の学生はほとんどいない。また、理工学部の学生がごく稀に履修していることもある。

人文学部はキリスト教学科・人類文化学科・心理人間学科・日本文化学科の4学科に分かれるが、最も多いのは人類文化学科の学生で、これは考古学や人類学・歴史学を専攻する学生がいるためであろう。それ以外の学科では心理人間学科の学生以外、毎年数人程度履修している。

履修学生の数は、ほぼ横ばい状態である。年度初めのガイダンスでは履修モデルを示しており（第1表）、博物館概論から履修するように指導している。そのため、博物館概論の履修生は例年80～90名ほどになる。しかしこの数は、先述のように博物館概論が人文学部共通科目として履修することができるため、学芸員資格取得を目指さない学生も受講していることを反映している。

コロナ禍で多くの大学が学芸員養成課程を履修する学生を減らしているという話が、2020年12月18日の全博協西日本部会の大会での研修会で出てきたが、南山に関しては、履修学生の数はコロナには影響されてはいないように見える（第2表）。実は、それ以前から時間割の

学芸員養成課程科目履修モデル

パターン1（標準型）

Q	1年次	2年次	3年次	4年次
1	博物館概論 生涯学習論			
2			博物館学B	
3			博物館学E	
4		視聴覚メディア論		
夏	博物館学A	博物館学C		博物館実習3
冬		博物館学D		
通				博物館実習1・2

パターン2（短期型）

Q	1年次	2年次	3年次	4年次
1	博物館概論 生涯学習論			
2		博物館学B		
3		博物館学E		
4		視聴覚メディア論		
夏	博物館学A	博物館学C	博物館実習3	
冬		博物館学D		
通			博物館実習1・2	

第1表 南山大学博物館学芸員養成課程必修科目の履修モデル

っていた筆者が担当している博物館概論の初回での学生に対するアンケート調査では、展覧会の監視員を学芸員だと思っている学生もいれば、筆者も行ったことのないような博物館・美術館まで訪れているような学生もいた。平均すれば、一般的な知識として博物館あるいは学芸員を知っているというレベルである。

(3) 卒業後

では学芸員養成課程を履修した学生は、卒業後に学芸員の道を進んでいるか、というと、残念ながらほとんどいない、というのが実情である。筆者が南山大学の学芸員養成課程を担当するようになってからでも、おそらく10名はいないであろう（註3）。

ただ、この状況を学生の問題だけに帰すべきではないだろう。何よりも学芸員資格を取得し

都合等によって、ある程度の増減は生じていたが、コロナ禍が原因で履修者数が大きく減ったということはないようである。その理由については調査したことがないので、説明することはできないが、憶測を許していただけるならば、南山の学生は全体的にまじめで素直な傾向があることと、履修学生の所属学部は女子の比率が高く、そのことから特に美術館に対する指向性が強いように感じられることなどがあるものと思われる。

ただし、学生の博物館に対する知識・経験の振り幅は大きく、コロナ以前に行

	博物館概論履修者数			博物館実習修了者数
	人文学部共通科目	資格科目	計	
2021	61	34	95	(33)
2020	49	31	80	42
2019	49	24	73	24
2018	82	27	109	13
2017	51	18	69	54

第2表 博物館概論履修者数と博物館実習修了者数（ ）は見込み

でも博物館での採用が非常に少ない状況で、それでも学芸員を目指すことがリスクの高いものであるということは十分理解できる。また、南山大学では学芸員養成課程の履修を学部学生優先にしており、学芸員として就職できる可能性のより高い大学院生が大学院進学後に履修しにくいという問題があることも指摘しておきたい。

2. 博物館実習

(1) クラス編成

では、本題である博物館実習について説明していきたい。

先に、実習の履修学生数が博物館概論の3分の1程度と述べたが、実数としては40名前後で推移している。南山では博物館実習は3クラス開講していて、それぞれ博物館実習1・2・3となっており、約40名の学生はそのうちのどれか一つのクラスを時間割などそれぞれの都合に合わせて選択できるようになっている。

また、南山では現在4学期制（クォータ制）となっているが、実習の1・2は通年開講しており、3は夏期集中で行っている。担当は2・3を黒澤が担当し、1は他学部の専任教員（教授）が担当している。

通年開講の実習1・2は木曜日に配置されており、木曜2限が実習1、3限が実習2となっている。ここでは筆者が担当している実習についてのみ述べることにする。

(2) 展示制作

南山大学の博物館実習は3クラスともに、大学博物館である人類学博物館で行われている。第3表に2021年度の博物館実習2の実習予定表を示した。

実習の方針としては、展示制作と学習プログラム作りを基本として、それぞれの課題の中で資料の取り扱い、展示企画の立て方、事務的な処理等について指導をしている。また、授業後には毎回日誌を提出させ、その日の実習内容の振り返りを行っている。

それでは、具体的に進行を紹介していきたい。

まず、最初に人類学博物館の概要説明と施設の説明を行う。概要説明では博物館の理念、展示解説そして諸室案内を行う。諸室案内については、様々な作業を人類学博物館で行うため、どのような諸室があり、何がどこにあるかを事前に知っておいてもらうためである（ただし、学生はほとんど覚えていない）。その後、人類学博物館で使っているワークシートを使ったゲーム、さわる展示（註4）を活かしたワークショップ等を行って、博物館に慣れてもらうようにしている。

2回目に行うのは、基本的な資料の取り扱いである。具体的には桐箱の取り扱いと考古資料の梱包実習を行っている。ここで、資料を取り扱う際の基本的な所作（例えば、腕時計や指輪を外す、資料は両手で持つ等）の指導を行っている。

一応、ここまでがイントロダクションで、3回目以降には具体的に展示制作を行う。展示制作はこれまで夏期休暇前（春学期）に2回、夏期休暇後（秋学期）1回実施してきた。春学期の2回は、人類学博物館の通常の企画展制作に学生が加わるという形をとっており、展示の企画及び資料選定は人類学博物館学芸員が行っている。ただし、2021年度は春学期の展示制作は1回にした。これは、2021年度から従来の90分から100分授業に切り替わり、授業回数が減っ

Q	月	回	日にち	項目	準備	備考	
Q1	4月	1	8日	実習の進め方についての説明／人類学博物館の説明	シレットクイズ等	施設案内、展示室でのアクティビティ	
		2	15日	資料の取り扱い	桐箱、梱包材	桐箱、考古資料の梱包	
		3	22日	博物館企画展準備① 展示趣旨の説明・班分け・展示資料の確認等	博物館による展示趣旨の説明		
	5月	4	6日	博物館企画展準備② パネル、キャプション、レイアウト、ポスター等の制作①	パネル原稿	読み合わせを含む	
		5	13日	博物館企画展準備③ パネル、キャプション、レイアウト、ポスター等の制作②			
		6	20日	博物館企画展準備④ パネル、キャプション、レイアウト、ポスター等の制作③			
		7	27日	博物館企画展準備⑤ パネル、キャプション、レイアウト、ポスター等の制作④			
Q2	6月	8	10日	展示制作	展示資材等		
		9	17日	展示を使った学習プログラム作り①			
		10	24日	展示を使った学習プログラム作り②		ワークシート等があれば7月7日までに提出	
	7月	11	8日	学習プログラムの実践	必要な資料、ワークシート等		
		12	15日	展示評価	評価シート		
		13	22日	紀要展撤収		課題2の準備開始	
Q3	9月	14	16日	実習生自主展示準備① テーマの選択、班分け、企画書の作成	企画書の用紙		
		15	23日	実習生自主展示準備② 企画書の作成、資料の選定			
		16	30日	実習生自主展示準備③ 資料調査①	資料調査カード		
	10月	17	7日	実習生自主展示準備④ 資料調査②			
		18	14日	実習生自主展示準備⑤ 資料調査③			
		19	21日	実習生自主展示準備⑥ パネル、キャプション、レイアウト、ポスター等の制作①		資料調査継続か？原稿の作成	
		20	28日	実習生自主展示準備⑦ パネル、キャプション、レイアウト、ポスター等の制作②			
Q4	11月	21	4日	実習生自主展示準備⑧ パネル、キャプション、レイアウト、ポスター等の制作③			
		22	18日	実習生自主展示準備⑨ パネル、キャプション、レイアウト、ポスター等の制作④			
	12月	23	25日	実習生自主展示準備⑩ パネル、キャプション、レイアウト、ポスター等の制作⑤		11月26日～12月9日 実習1の展示	
		24	2日	実習生自主展示準備⑪ パネル、キャプション、レイアウト、ポスター等の制作⑥			
		25	9日	実習生自主展示制作		9日午前、実習1の展示撤収	
		26	16日	展示を使った学習プログラム作り		ワークシート等あれば1月12日までに提出	
		1月	27	13日	学習プログラムの実践、実習生自主展示撤収	必要な資料、ワークシート等	
			28	20日	まとめ		

通常の時間割以外に、学外実習（見学実習）を実施する。県内を中心とした博物館で3回程度行う。また、状況が許せば東京の博物館に1泊2日の予定で行くが、現状では期待できない。

第3表 2021年度の博物館実習（通年）の授業予定

たことに連動している。

また、展示はガラスケースを使用して制作する。先述のように、人類学博物館の展示は「さわる展示」であるが、実は常設展示には2か所だけガラスケースが配置されている。一つは名古屋市文化財に指定されている大須二子山古墳の出土品の展示で、指定文化財であることを考慮したものである。もう一つは導入部分の展示で、このガラスケースは他館からの借用資料の展示とともに、博物館実習での展示に使うという目的で設置したものである。というのも、いくら人類学博物館が「さわる展示」であると言っても、ほとんどの博物館の展示はケーシングされているわけで、「さわる展示」だけでは学芸員として必要な展示の仕方を学ぶ機会がなくなると考えたからである。

さて、展示のテーマであるが、通常、春学期の企画展は、「新収蔵品」展として、前年度に新たに収蔵された資料の紹介を基本としていた（註5）。しかし、2021年からはよりテーマ性を強くして、当該年度は「東ニューギニア学術調査団の収蔵品」というタイトルで企画展を制作した。

秋学期以降は実習履修学生による自主企画の展示である。当然のことながらグループワークとなるが、こちらであらかじめグループを決めず、学生に人類学博物館の常設展をみながらテーマ選定をさせ、似たようなテーマを持った学生をまとめてグループを構成するようにしている。こういうやり方をすると、グループに入らない学生も出てくる可能性はあるが、実際には3～5名程度のグループにまとまっていく。

テーマの方向性が見えたら、次に

は展示資料の選定を行う。対象となる資料は常設展示だけでなく収蔵庫のものも含めている。こうして資料選定がほぼ終わると、次に展示資料の調査に入る。このときには資料調査カードを用意して、資料のサイズの記録、破損状況、そして資料が展示に耐えうるかどうかの判断を記入させることにしている（第1図）。これは博物館での資料の貸し借りの際に行われている作業とほぼ同じである。また、資料調査に入る際には、人類学博物館に対して「資料調査願い」の文書を作成して、調査を希望する資料のリストと併せて提出させている。こうしたことをするのは、博物館でのやり取りは原則として文書主義であるため、書類の書式や記入事項を指定して文書を作成させている。以前は捺印の仕方まで指導したが、押印廃止の流れの中で、それはやめてしまった。この資料調査が、最も時間のかかる作業となる。

資料調査が終了したところで、作成した資料調査カードをもとに、展示のレイアウト、パネルの種類と枚数を1枚の見取り図に落とし込む作業を行う。このときにパネルとキャプションの原稿作成とデザインも併せて行う。解説パネルの原稿は、各グループで作成し、全員で読み合わせを行って文章をブラッシュアップしていく。

展示レイアウト、パネル・キャプション原稿ができたら、ハレパネを使ってのパネル・キャプションの制作に入る。本来はもっと簡便な方法でパネル・キャプションは制作でき、しかもゴミの少ないやり方はあるのだが、実際に博物館ではまだハレパネを使うケースも多いと思うので、このやり方を続けている。

資料調査カード

資料名		資料番号	
採集地		所蔵者	
調査年月日	年 月 日	調査場所	
資料カテゴリー			
観察所見			
資料の状況			

調査者氏名

第1図 資料調査カード



第2図 2021年度の博物館実習履修学生による企画展
 上：展示ケース内の展示
 （左：暮らしの道具 右：顔は語る）
 左：露出展示（昭和の子どものおうち時間）

実際の展示作業にあたる前に、博物館に対して資料借用依頼を提出させる。書式自体は資料調査願いと似たようなフォームとなるが、文書の交換手順がより複雑になるので、その手順についての説明をしている。そして、資料の貸し出しと展示の許可が出たところで、展示作業に入る。

展示自体は小規模なもので、展示台2～3台程度のものであるが、それでも作業は授業時間内に完了することはまずない。それは準備が間に合わなかったり、いざ展示してみたら思っていたものと違って修正を加えたりと、それこそ実際の博物館と同じような試行錯誤が繰り返される。タイムリミットは博物館の閉館時間である16時30分なので、ほぼ午後いっぱい展示作業になるケースも少なくない。だが、そうしたプロセスをきちんと経験しておくことは、博物館実習として意義のあることだと考えている。

なお、学生たちの企画展についてはポスターと人類学博物館のウェブサイトで広報している。ポスターは学生たちが制作するよう指導してきたが、近年は時間的な余裕がなくなり、実習のTAにたのんで作ってもらうケースが増えてきている。

展示期間は概ね12月中から年明け1月の実習終了までである（第2図）。展示の撤収が済んで、1年間にわたる実習も終了する。

(2) 展示評価

制作した展示は、全て学生たち自身によって評価を行う。その評価シートは第3図a・bに示したように、評価項目と自由記述で構成されている。評価項目は担当教員である筆者の方で評価項目を用意したが、時間的な余裕があれば、後述の学習プログラムに対する評価同様、ル

博物館企画展「・・・・・・・・・・・・・・・・」評価シート

	模範的な展示となっている (10点)	展示として優れている (7点)	発展途上である (3点)	
展示構成	<input type="checkbox"/> 展示のコンセプトがはっきりしている <input type="checkbox"/> 展示の構成が明確である	<input type="checkbox"/> 展示のコンセプトがはっきりしているが、不明瞭な部分もある <input type="checkbox"/> 展示の構成が明確であるが、混乱も見られる	<input type="checkbox"/> 展示のコンセプトが不明瞭である <input type="checkbox"/> 展示の構成が不明瞭である	
解説	<input type="checkbox"/> 解説が正確で適切である <input type="checkbox"/> 解説文の量が適切である (概ね200字以内) <input type="checkbox"/> 解説文に誤字脱字がない <input type="checkbox"/> 解説パネルのデザインが見やすい <input type="checkbox"/> キャプションの情報が適切である <input type="checkbox"/> キャプションの情報が正確である <input type="checkbox"/> キャプションに誤字脱字がない <input type="checkbox"/> キャプションのデザインが見やすい	<input type="checkbox"/> 解説は概ね適切であるが、曖昧なところもある <input type="checkbox"/> 解説文の量が模範的な量よりもやや過不足がある <input type="checkbox"/> 解説文に誤字脱字がいくつか見受けられる — <input type="checkbox"/> キャプションの情報は概ね適切であるが、過不足を感じる部分もある <input type="checkbox"/> キャプションの情報は概ね適切であるが、曖昧なところもある <input type="checkbox"/> キャプションに誤字脱字がいくつか見受けられる —	<input type="checkbox"/> 解説が正確で適切でない (多過ぎ、少な過ぎ) <input type="checkbox"/> 解説文に誤字脱字が目立つ <input type="checkbox"/> 解説パネルのデザインが見づらい <input type="checkbox"/> キャプションの情報が適切ではない <input type="checkbox"/> キャプションの情報が正確ではない <input type="checkbox"/> キャプションに誤字脱字が目立つ <input type="checkbox"/> キャプションのデザインが見づらい	
	資料	<input type="checkbox"/> 展示資料の選択意図がはっきりしている <input type="checkbox"/> 展示資料と解説とが適合している <input type="checkbox"/> 展示資料の安全が確保されている <input type="checkbox"/> 展示の仕方に工夫が感じられる	<input type="checkbox"/> 展示資料の選択意図はわかるが、不明瞭な部分もある <input type="checkbox"/> 展示資料と解説とは概ね適合しているが、合っていない部分もある <input type="checkbox"/> 展示資料の安全が確保されているが、危ないと感じる部分もある <input type="checkbox"/> 展示の仕方に工夫が感じられるが、改善の余地がある	<input type="checkbox"/> 展示資料の選択意図がわからない <input type="checkbox"/> 展示資料と解説とが適合していない <input type="checkbox"/> 展示資料の安全が確保されていない <input type="checkbox"/> 展示の仕方に工夫が感じられない
	ポスター	<input type="checkbox"/> ポスターのデザインがすぐれている <input type="checkbox"/> ポスターの情報が適切である	<input type="checkbox"/> ポスターのデザインがすぐれているが、気になるところもある <input type="checkbox"/> ポスターの情報が適切であるが、改善の余地がある	<input type="checkbox"/> ポスターのデザインが見づらい <input type="checkbox"/> ポスターの情報が適切でない
	自由記述			

氏名

第3図a 展示評価シート

氏名	得点	良い点	悪い点	その他 (良いか悪いかわからない)
A	107/160	点数が多いにも関わらず、整然と並んでいてバランスが良く見えてよい。モノの並びだけでなく、パネルとモノの配置に偏りがなく、全体的なバランスが良い	パネルの文字がズレていたり、キャプションの大きさが展示と合っていないなどの見やすさがある。ただし、これは作成に不慣れであったことが原因だと思われる	
B	122/160	展示構成の流れはよい	キャプションの色がもう少し薄くすべきだった・キャプションの文字をもう少し大きくすべきだった・映像とそれについての解説パネルを近づけた方がよい・キャプションの書き方の説明を書くべきだった・パネル、キャプションのルビ・地図がほしい・展示物の説明が少ない・展示と解説が一致していないことが多い	解説パネルの分量・パネル、キャプションのバランス・展示物が多い
C	97/160	解説パネル (5枚目) の余白の取り方が見づらい (もう少し行間を空けた方がよい) ・展示資料が収蔵品であることはわかるがそれ以上はわからない・資料と解説の非難・資料が多い・映像展示はどこへ消えてしまったのか (映像が遠いため、6枚目のパネルの文章がよくわからない) ・キャプションの紙の色と展示カラーの楕が同系色で目目に判別しにくい (これなら楕も黒でよかったかも) ・磨製石斧の位置がばらけていると感じる	パネルの高さ (遠くでも読める)	
D	111/160	—	そもそもこの展示の主題が何であるかが、バツと見ただけではよく分らなかった。今回の場合であれば、「」の前が全体の展示の上の方に「東ニューロニクス学術調査団による調査の記録」などという「題」にあたるものがあるべきであるように感じた・照明が全体的に黄色っぽいので、キャプションが少し見にくいように感じた・文字の大きさがもう少し大きくても良いかなと感じた (キャプション) ・「映像」のパネルから実際に映像が流れる機器までが遠く、工夫できる部分があると感じた・映像に登場するキャプションに解説がなく、展示品の名前しか書いていなかったの、少し解説があっても良いかなと思った・上述のように映像とも関連づけて解説がつけられると良いかなと感じた	ルビの有無・キャプションを1個にまとめる? ・キャプションの文字の大きさ・パネルが2枚にわたっているのはOK?

第3図b 展示評価の結果のまとめ (抜粋。なお氏名は全てアルファベットに替えている。)

ーブリックによる評価に切り替えていきたいと考えている。

各自で評価シートに記入した後、展示を見ながら意見を述べ合う時間を取る。学生たちは思ったことを発言してよいのだが、必ず展示の良い点と悪い点を挙げるように促している。展示を批判的に見る目を養うことは、将来学芸員として展示を制作するにあたり、客観的な見方ができることにつながると思うからである。

なお、この展示評価自体は点数化してはいない。

(3) Web展示

これはコロナ禍の中で始めた取り組みで、学生たちの展示を人類学博物館のウェブサイトで公開しているものである。学生たちには、資料調査の段階で、各自のスマホで写真を撮らせ、それを後で編集してウェブサイトにアップするという方式である。一応、展示企画の検討と並行して行っているため、資料の画像さえあれば、説明やキャプションは実際の展示（リアル展示）から流用すればよく、それほどの手間がかかるわけではない。ただし、リアル展示をそのままウェブで公開したときにわかりにくい点も出てくるので、そうしたときにはウェブ用に編集することになる。

Web展示は、展示制作グループごとにPower Pointで編集し、それをPDF化して提出してもらっている。提出もメールである。そしてそのデータを人類学博物館に送ってウェブサイトにアップロードしてもらう（註6）。

実は今年度のWeb展示の制作はZoomによるオンラインで行った。これはコロナの影響ということではなく（ちょうど感染者数が激減していた時期である）、後述するように、コロナ禍以後も博物館活動、そして学芸員の業務にオンラインの活用が不可欠だと考えるからである。学生たちは、筆者などよりもはるかに電子メディアの使い方には習熟しているが、それはあくまでも受け手としての利用であり、どのようなコンテンツを作っていくかということについては、逆に不慣れである。そういう意味では、こうしたオンラインを活用した作業に慣れることは必須であろう。

(4) 学習プログラムの作成

南山大学での博物館実習のもう一つの柱は、学習プログラム作りである。今日、博物館・美術館ではワークショップの開催やワークシートの提供が当たり前になっているから、身につけるべき重要なスキルといえる。

南山では、人類学博物館の常設展示を活用したプログラムを一つ、秋学期に制作した自主企画展を活用したプログラムを一つ作ることを課題としている。前者では「さわる」ということに、後者ではワークシートの制作に、それぞれ重点を置いている。こうしたプログラムを考える場合重要なことは、そのプログラムを通して何を伝えたいのか、何を学んでほしいのか、その目的を明確化することであると考えており（黒沢2015a）、そのために学習プログラムの企画書を作成させている（第4図）。

また、学習プログラムの評価には、今年度よりルーブリックを実験的に導入してみた（第5図）。展示評価もそうだが、通常、こうした評価は担当教員が作成するものである。しかし、アメリカの大学で使われているルーブリックの解説書では、学生とルーブリックを作成する方法が説明されている（スティーブンス、レビ 2014）。それによるとルーブリック作成にもいく

つかのレベルがあるようだが、少なくとも学生が自分たちの評価基準を自分たちで作成することで、どのようなプログラムを作れば良いかという目標が可視化されることは大きなメリットである。ただし、まだ教員と学生の双方がこの方法に不慣れなため、十分にループリックが活用できているわけではない。今後、より一層洗練させていく必要はあるだろう。

(5) その他

博物館実習では、学内での実習以外に他館での見学実習を実施している。通常は、春学期に3館、夏季休暇中に1泊2日で東京の明治大学博物館と國學院大学博物館に行くことにしていた。しかし、昨年度・今年度とコロナ禍で東京の博物館見学は断念しており、そのため近隣の博物館での見学実習を例年の2倍の6館（一宮市博物館、名古屋市博物館、豊田市郷土資料館、美濃加茂市民ミュージアム、北名古屋市歴史民俗資料館、高浜市やきもの里かわら美術館）で行なっている。

タイトル:		
対象者:	対象年齢:	レベル:
資料:		
素材:		
場所:		
進行		
目的:		

第4図 学習プログラム作成シート

学習プログラム評価ループリック

評価項目	概観的なプログラム (10点)	優秀なプログラム (7点)	発展上のプログラム (3点)
満足度	<input type="checkbox"/> 博物館資料に興味を持つことができた	<input type="checkbox"/> 興味を持った博物館資料もあった	<input type="checkbox"/> 博物館資料に興味を持つことができなかった
	<input type="checkbox"/> 参加して楽しかった	<input type="checkbox"/> 参加して概ね楽しかった	<input type="checkbox"/> 参加して楽しくなかった
	<input type="checkbox"/> 新しい発見があった <input type="checkbox"/> 想像力を働かせることができた <input type="checkbox"/> 予備知識がなくとも楽しめた	<input type="checkbox"/> 参加して新しい発見がいくつかあった <input type="checkbox"/> 想像しやすいところとしくにくいところがあった <input type="checkbox"/> 予備知識がないとわからないところもあった	<input type="checkbox"/> 新しい発見はなかった <input type="checkbox"/> 想像力を働かせることができなかった <input type="checkbox"/> 予備知識がないと楽しめなかった
構成	<input type="checkbox"/> オリジナリティがあるプログラムだった	<input type="checkbox"/> 類似したプログラムをやった(見た) ことがあった	<input type="checkbox"/> プログラムにオリジナリティがなかった
	<input type="checkbox"/> 目的が明確だった	<input type="checkbox"/> 何のためにやっているかわからないところもあった	<input type="checkbox"/> 目的がよくわからなかった
	<input type="checkbox"/> ルールが明確でシンプルだった	<input type="checkbox"/> ルールがわかりにくいところがあった	<input type="checkbox"/> ルールが複雑で、何をやるのかわからなかった
	<input type="checkbox"/> プログラムの量や時間が適切だった	<input type="checkbox"/> プログラムの量や時間にやや過不足があった	<input type="checkbox"/> プログラムの量や時間が不適切だった
	<input type="checkbox"/> 文字ではなく、モノを中心としたプログラムだった	<input type="checkbox"/> モノを中心としながらも、文字による説明や作業が多かった	<input type="checkbox"/> モノを中心としたプログラムというよりも文字中心だった
	<input type="checkbox"/> 素材(資料)の選択が適切である	<input type="checkbox"/> 素材(資料)の選択は全体としては適切だが、そうでないものを含んでいる	<input type="checkbox"/> 素材(資料)の選択がプログラムの目的に照らして不適切である
進行	<input type="checkbox"/> 素材(資料)についての理解が適切である	<input type="checkbox"/> 素材(資料)の理解は概ね適切だが、一部に不正確な部分がある	<input type="checkbox"/> 素材(資料)についての理解が不十分である
	<input type="checkbox"/> 必要な道具が用意されている	<input type="checkbox"/> 必要な道具が一部足りていない	<input type="checkbox"/> 必要な道具が用意されていない
	<input type="checkbox"/> 参加者と資料、双方の安全が確保されていた	<input type="checkbox"/> 参加者と資料のどちらかの安全は配慮されていた	<input type="checkbox"/> 参加者と資料の両方に危険があった
	<input type="checkbox"/> 資料の観察を促せるものになっていた	<input type="checkbox"/> 資料の観察を促さなくてもよかった	<input type="checkbox"/> 資料の観察を促せるものになっていなかった
	<input type="checkbox"/> ささやかな展示を活用していた	<input type="checkbox"/> ささやかな展示を部分的に活用していた	<input type="checkbox"/> ささやかな展示が活用されていなかった
	<input type="checkbox"/> 五感を使うものとなっていた	<input type="checkbox"/> 五感を使うものとなっていた	<input type="checkbox"/> 見ることだけが求められるものだった
理解	<input type="checkbox"/> 自分の考えを押し付けず行動がない	<input type="checkbox"/> 自分の考えを押し付けてはいるが、一部、強引に説明するところがある	<input type="checkbox"/> 自分の考えを押し付けるような行動が多い
	<input type="checkbox"/> 参加者の意見をきちんと聞いている	<input type="checkbox"/> 参加者の意見をきちんと聞こうとしているが、時折聞き流しやスルーがある	<input type="checkbox"/> 参加者の意見を聞いていない
	<input type="checkbox"/> 説明される理論・学説が正確である	<input type="checkbox"/> 説明される理論・学説は概ね正確だが、部分的に理解が不足しているところがある	<input type="checkbox"/> 説明される理論・学説が不正確である
レベル	<input type="checkbox"/> 説明が論理的である	<input type="checkbox"/> 説明は概ね論理的だが、時折飛躍がある	<input type="checkbox"/> 説明が非論理的である
	<input type="checkbox"/> 難易度が参加対象者のレベルに見合っていた	<input type="checkbox"/> 難易度が参加対象者のレベルに見合っていない	<input type="checkbox"/> 難易度が参加対象者のレベルに見合っていない
ワークシート	<input type="checkbox"/> デザインが良かった	<input type="checkbox"/> デザインに工夫が必要だと感じた	<input type="checkbox"/> デザインが良くない
	<input type="checkbox"/> ワークシートの構成がわかりやすかった	<input type="checkbox"/> ワークシートの構成に工夫が必要だと感じた	<input type="checkbox"/> ワークシートの構成がわかりやすかった
展開	<input type="checkbox"/> 視点が広かった	<input type="checkbox"/> 視点が広くないところもあった	<input type="checkbox"/> 視点が狭かった
	<input type="checkbox"/> 本プログラムの次の展開が示されている	<input type="checkbox"/> 本プログラムの次にどう展開するのかがあまり明示的ではない	<input type="checkbox"/> 本プログラムの次の展開がない

得点

／260点

氏名

第5図 学習プログラム評価のためのループリック

3. コロナ禍と博物館実習

冒頭でも述べたように、コロナ禍で各大学ともに博物館実習の進め方には苦勞されていることは、全博協の調査等により明らかであるし、南山大学でも想像以上に担当教員に負担がのしかかっている。しかし、この状況の中からは、これからやるべきことが見えてきたように思える。その最大のものがデジタルコンテンツとオンラインの活用である。

コロナ禍の中、多くの博物館が休館を余儀なくされていたが（註7）、そんな中でデジタルコンテンツの配信が広まってきたことも事実であろう。北海道博物館が中心になっている「おうちミュージアム」には約230の博物館がリンクを張っているし、各館でYoutubeなどを使った展示解説等も非常に充実してきた。実は、南山大学の実習でも、海外の博物館・美術館のウェブサイト見学を実習の課題の一つとしているが、多くの学生が世界の有名博物館・美術館のコンテンツの充実ぶりに驚いている（筆者も驚いている）。

また、人類学博物館では明治大学博物館や名古屋大学博物館との連携事業として、合同の講演会やシンポジウムを行っているが、これらもオンラインで配信することで、遠隔地からの参加が増えている。

先にも述べたように、これから先、たとえコロナがおさまったとしても、デジタルコンテンツの作成やオンラインの活用といったスキルは、学芸員にとって必須のスキルになっていくに違いない。だが、これもすでに指摘したことだが、学生たちはまだコンテンツ作りには不慣れである。そういう意味で、博物館実習の中でそうしたスキルと習得するまで行かなくとも、その必要性を認識する程度には経験を積ませるべきと思う。

4. 博物館実習に対する考え方

筆者は今から30年も前に「博物館実習考」という文章を書いたことがある（黒沢1993）。

この中で筆者は「博物館実習とはその実習という性格上、職業訓練的な色合いの強い科目として位置付けられよう」と述べているが、これは今日に至るまで変わっていない。冒頭でも述べたように、学芸員養成課程の一連のカリキュラムにおいて、最終的な「仕上げ」の科目なのであり、博物館実習を履修する学生には、全員が学芸員を目指してもらいたいと思っている。

また、学芸員養成課程の目的はただ一つ、良い学芸員を育てることにあるとすれば、そのためには大学だけでなく、博物館・美術館とも共同で、学芸員養成のカリキュラムを検討していくことも視野に入れるべきだろうと思う。筆者が編者となった『博物館教育論』には、「博物館実習」という節がある（黒沢2015b）。博物館教育の概説書に博物館実習をいれられることはまずないが、敢えて入れたのは、博物館実習も博物館教育の重要な一環であることを主張したかったからである。

30年近く前に考えたことは今でもあまり変わることなく、筆者の中に燻っている。

おわりに

筆者は、前職である明治大学博物館の学芸員だった時代からすでに30年以上にわたって博物館実習を担当してきた。決して短い時間ではないと思うが、それだけの時間を費やしても、良い実習ができたと思ったことは一度もない。常に試行錯誤と迷走の連続である。

ただ、そんなときの救いは学生たちである。博物館実習という科目は、教員が指導するのではなく、学生と一緒に作り上げていく科目であることを教えてもらっていると実感する。

もしかしたら（あるいは間違いなく）南山大学で行っている筆者の博物館実習は特異なものかもしれない。本稿に対してご意見・ご叱正いただければ幸いである。

本稿を草する機会を与えていただいた明治大学学芸員養成課程の駒見和夫先生と、事務的な不手際の多い筆者をフォローしてくれた明治大学学芸員養成課程事務室の関良子さんに感謝します。

註

- 1：博物館実習に限らず、博物館活動、学芸員の業務自体が人と接することに基盤があるはずであろう。
- 2：南山大学の学部構成は人文学部・外国語学部・法学部・経済学部・経営学部・総合政策学部・国際教養学部・理工学部の8学部から成っている。学芸員養成課程は全学に向けて開講しているが、国際教養学部の学生だけは学芸員養成課程履修の対象とはなっていない。これは学部設置の際の方針である。
- 3：ここには博物館勤務だけでなく、行政の文化財担当として「学芸員」という職名で勤務している者も含まれる。また、筆者の赴任以前の卒業生も加えれば、少なくとも愛知県内だけでも現状で（つまり退職した人は除いて）10名程度にはなるものと思われる。
- 4：南山大学人類学博物館は、2013年にリニューアルし、ほぼ全面的に展示物をさわる「さわる展示」を実現した。これを実現した背景には国立民族学博物館の広瀬浩二郎准教授が提唱するユニバーサル・ミュージアムの考え方に対する共鳴・共感がある（黒澤2016）。
- 5：あくまで基本であり、前年度の新収蔵資料が少ない場合にはより2年前、3年前に収蔵された資料を含む場合もある。
- 6：今年度のWeb展示のURLは、<https://rci.nanzan-u.ac.jp/museum/katsudou/kasou/022709.html>
- 7：閉館する博物館も多いと聞く。九州産業大学の緒方泉氏によれば、このコロナ禍で世界の博物館の13%が閉館すると見込まれているという。

参考文献

- 黒沢浩 1993「博物館実習考」『1992年度明治大学学芸員養成課程年報 Museologist 8』明治大学学芸員養成課程
- 黒沢浩 2015a「博物館教育の特色」『博物館教育論』講談社
- 黒沢浩 2015b「博物館実習」『博物館教育論』講談社
- 黒澤浩 2016「さわる展示の未来－南山大学人類学博物館の挑戦」『ひとが優しい博物館 ユニバーサル・ミュージアムの新展開』（広瀬浩二郎編）青弓社
- ダネル・D・スティーブンス、アントニア・レビ（佐藤浩章監訳、井上敏憲・俣野秀典訳）2014『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部
- 文部科学省 2009『博物館実習ガイドライン』